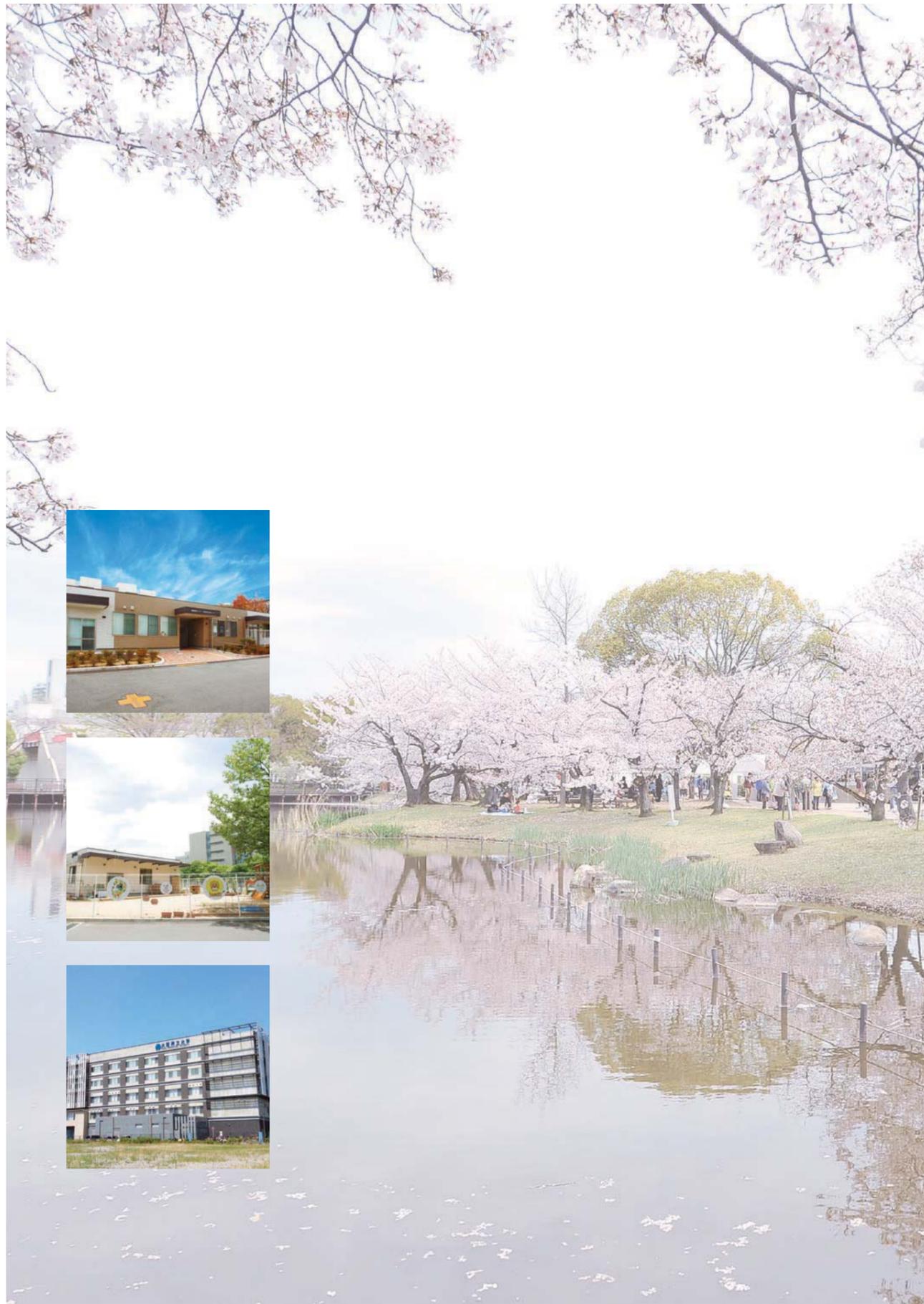




大阪府立大学 ロールモデル集 研究紹介



大阪府立大学
ダイバーシティ研究環境研究所
Research Center for the Diversity Research Environment



理事長・学長ごあいさつ

大阪府立大学
理事長・学長

辻 洋

Hiroshi Tsuji

Profile

2002年より、本学工学研究科教授。文理融合の現代システム科学域設立に貢献。フランスやカンボジアとの国際交流にも努めた。2013年理事（教育研究担当）・副学長（～2015年）。2015年より現職。本学着任前の民間勤務時には、多くの女性研究者と情報システムの研究会開発に従事。博士（工学）、技術士（情報工学）。障がい者スポーツ「ボッチャ」の協会公認一般審判員。趣味は、海釣り、家庭菜園、ヨガ。

大阪府立大学は「高度研究型大学—世界に翔く（はばたく）地域の信頼拠点—」を基本理念と掲げ、質の高い研究を行うことにより教育の質を高め、さらに研究成果を産業界に還元しています。

私は平成25年度から2年間、女性研究者支援事業担当の副学長を務め、本学の多様な人材活用の一環として、女性研究者支援の必要性を深く認識しました。大阪府立大学は、平成27年度に公立大学として唯一、「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に採択されましたが、その時に「女性研究者の研究力向上」と「上位職への両立支援」を強化すべく、21世紀科学研究機構（現21世紀科学研究センター）内に、ダイバーシティ研究環境研究所を立ち上げました。21世紀科学研究機構は、研究分野の異なる複数部局の教員がそれぞれの専門知識を融合させるための本学独自の研究所方式であり、有効な成果を上げています。その中にダイバーシティ研究環境研究所を位置づけることにより、車の両輪として教員と職員がともに協力し合って進めてきた研究環境の整備を、より一層発展させて進めています。

ところで、私が理事長・学長として大切にしている言葉があります。それは「You are not alone in your role」（ひとりじゃない）です。大学運営も研究も、決してひとりで実行できるものではなく、多くの方々とのつながりや協力が必要です。そして、本学でこれまで実施してきた「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」による女性研究者支援事業は、女性研究者と学内外の人や団体とのつながりを広げてきました。今回『ロールモデル集』でご紹介する女性研究者たちの研究成果も、こういったつながりの中から生まれてきたことでしょう。

大阪府立大学は「垣根のない大学」です。この『ロールモデル集』が、女性研究者の研究成果をより多くの方々・多くの組織とつなぎ、公立大学として、産学官連携を含む地域社会での女性の活躍にも貢献できるよう、取り組んでいきたいと考えています。皆様のいっそうのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。



理事・副学長ごあいさつ

大阪府立大学は、多様・融合・国際の3つの視点を大切にしながら、独創的で質の高い知識や技術を蓄積してきました。「大阪府立大学における多様な人材活用推進の基本方針」に、革新的な知を創出する拠点には「年齢・性別・国籍の違いを超えて、異なる価値観や経験・背景をもつ『多様』な人材が集い、互いに知的触発を受ける環境が不可欠である」と記述しているように、本学の組織としての成長には構成メンバーの多様性（ダイバーシティ）とバランスが重要と考えています。

平成22年度の文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」に採択されたのを契機に、本学は女性研究者支援事業に取り組み始め、平成27年度には文部科学省・科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に採択されました。そして、第3期中期計画（平成29年～34年度）に「女性教員比率21%の達成を目指す」と明記した上で、女性研究者支援の取り組みを「女性研究者の研究力向上」と「上位職への両立支援」へとバージョンアップして、女性研究者のスキルアップおよびキャリアアップ支援を行っています。

性別によって研究力に違いがあるわけではありませんが、本学では、まだ数少ない女性研究者に対しては、研究力向上のための支援が必要だと考えています。そこで女性研究者を対象とした学内インセンティブ（研究費補助）事業として、平成28年度より、ダイバーシティ研究環境研究所が「女性研究者 研究実践力強化支援プログラム（RESPECT）」を、研究推進本部が「女性研究者支援事業」を実施しています。これらは、研究費獲得が女性研究者の研究力向上につながることはもちろん、プレゼンテーションによる公開審査会を開催することで、研究分野が異なる女性研究者間の交流とネットワーク作りにも役立っているようです。

本学は「地（知）の拠点」として、研究成果を広く社会に還元し、地域や産業界の発展に貢献するため、産学官連携活動にも力を入れています。この『ロールモデル集』が、女性研究者が地域や企業等との共同研究などでさらに活躍できる橋渡しとなるよう、みなさまのお力添えを、どうぞよろしくお願いいたします。



大阪府立大学
理事(教育研究担当)
副学長(教育研究・男女共同参画担当)
研究推進本部長
学術情報センター長

石井 実

Minoru Ishii

Profile

1976年東京教育大学理学部卒業。1983年京都大学大学院理学研究科博士課程修了。1985年大阪府立大学農学部助手。同講師（1993年）、助教授（1995年）、教授（1996年）を経て、2005年同大学大学院生命環境科学研究科教授。2003年副学長・学生部長（～2005年）、2005年副学長・学生センター長（～2009年）、2010年特命副学長（～2013年）、2013年副学長、2015年理事。専門は動物生態学、昆虫学、保全生物学、生物多様性保全。理学博士。



ダイバーシティ研究環境研究所長 ごあいさつ

平成28年度から、本学の女性研究者支援事業のプログラム・オフィサーと、ダイバーシティ研究環境研究所長を務めております。この事業では、平成22年度から女性研究者支援センターを中心に研究者のワーク・ライフ・バランスを支援する取り組みとして開始し、充実させてきた経緯があります。

特に、平成27年度文部科学省 科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に採択されたことを契機として、新たにダイバーシティ研究環境研究所を設立しました。この研究所を中心に、異分野融合・共同研究における女性リーダーへの支援、女性上位職のワーク・ライフ・バランスへの支援など、女性研究者がリーダーシップを発揮してキャリアアップするための事業を推進しています。

本年度はその三年目となり、徐々に事業の成果が上がってきていることを実感しています。その一つは本学の教員に占める女性の割合です。平成29年5月1日現在18.7%、昨年度と比較して0.7ポイントアップしています。また女性上位職についても、教授における比率は15.4%で昨年度より0.8ポイントアップしています。さらに、研究リーダーとしての能力向上に関しては、女性研究者の本年度の科研費採択率は

35.7%（全国平均26.5%、本学男性教員21.3%）と高い数値を示し、関係者一同大変喜んでいただいております。

これもひとえに、学内外の多くの方々のご理解とお力添えと大変感謝しております。

そこで、今回のロールモデル集では、「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」事業の目的としているところのリーダーとして活躍している女性研究者の方々にご執筆をいただきました。このロールモデル集を通して本学の研究成果を多くの方々にご知っていただくことで、本学で生まれた「知の」種が、産業界や地域・社会のニーズと出会い、より活発な産学官連携のきっかけになることを願っております。

最後になりますが、本学の女性研究者支援事業が、本学の女性研究者だけでなく、全構成員にとって最適な研究・教育環境を提供できるよう、また、女性研究者の増加や活躍によってより活性化され、性別にかかわらず多様な人材が個人の能力と個性を発揮し、地域に還元することのできる公立大学となるよう、これからも努力していきたいと思っております。

今後とも、皆様のますますのご理解とご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

大阪府立大学
ダイバーシティ研究環境研究所長
人間社会システム科学研究科
現代システム科学域 教授
学長特別補佐(広報担当)

真嶋 由貴恵

Yukie Majima

Profile

広島県立広島看護専門学校公衆衛生看護学科卒業。香川大学教育学部総合科学課程情報科学コース卒業、同大学院教育学研究科博士前期課程、岡山理科大学工学研究科博士後期課程修了。広島県豊田郡川尻町、国立呉病院、神戸市看護大学助手、産業医科大学助教授、大阪府立看護大学看護学部准教授、大阪府立大学高等教育推進機構教授・工学研究科教授を経て現職。専門は医療・看護情報学、医療・看護分野でのICT（情報通信技術）の活用に関する研究に従事。博士（工学）、看護師、保健師、養護教諭（第1種）、衛生管理者。



Contents

- 3 理事長・学長ごあいさつ
- 4 理事・副学長ごあいさつ
- 5 ダイバーシティ研究環境研究所長ごあいさつ

●ロールモデル

- 8 **MODEL 01**  牧浦 理恵
工学研究科 物質・化学系専攻
工学域 物質化学系学類 准教授
- 10 **MODEL 02**  山口 夕
生命環境科学研究科 応用生命科学専攻
生命環境科学域 応用生命科学類 准教授
- 12 **MODEL 03**  吉原 静恵
理学系研究科 生物科学専攻
生命環境科学域 自然科学類 助教
- 16 **MODEL 05**  田間 泰子
人間社会システム科学研究科 人間科学専攻
地域保健学域 教育福祉学類 教授
- 18 **MODEL 06**  大川 聡子
看護学研究科 看護学専攻
地域保健学域 看護学類 准教授
- 20 **MODEL 07**  高 知恵
看護学研究科 看護学専攻
地域保健学域 看護学類 助教
- 22 **MODEL 08**  矢澤 彩香
総合リハビリテーション学研究科 栄養支援系領
域地域保健学域 総合リハビリテーション学類
栄養療法学専攻 准教授

- 24 女性研究者一覧
- 42 大阪府立大学の女性研究者支援事業紹介
- 46 編集後記

牧浦 理恵

Rie Makiura

工学研究科 物質・化学系専攻
工学域 物質化学系学類 准教授
博士(理学)

Profile

2000年 ▶ 筑波大学 第一学群 自然科学類 卒業
2002年 ▶ 筑波大学 大学院数理物質科学研究科
物質創成先端科学専攻 修了
2002~2007年 ▶ セイコーエプソン株式会社
テクノロジープラットフォーム研究所
2007~2010年 ▶ 九州大学大学院理学研究院
特任助教
2010~2015年 ▶ 大阪府立大学 21世紀科学
研究機構 ナノ科学・材料研究センター
特別講師(テニユアトラック講師)
2012~2016年 ▶ 科学技術振興機構 さきかけ
研究者(兼任)
2015年~ ▶ 大阪府立大学 大学院工学研究科
物質・化学系専攻 マテリアル工学分野
准教授(現職)
【主要業績】
2014年 ▶ 平成26年度 科学技術分野の文部科学
大臣表彰 若手科学者賞
2014年 ▶ 平成25年度 女性化学者奨励賞、
日本化学会

この先生のここがすごい

界面積み木細工によるナノシート創製に関して、2010年に材料関連の学術誌で最も影響力の高いNature Materials誌に掲載された論文は、これまでに300回以上引用されるほか、2014年にChemPlusChem誌に発表した論文は、2014,2015,2016年度の3年連続で最多アクセス論文になるなど、世界で注目を集める研究をされています。また、2015年には日本の科学技術発展への貢献が期待できる女性研究者を支援する目的で設立された「資生堂 女性研究者サイエンスグラント」を受賞。研究も子育ても全力で楽しみながら奮闘されています。

休日の過ごし方

現在3歳の娘がおり、休日は家族との時間を大切にしています。最近、ごっこ遊びが大好きで、本やテレビのキャラクターになることを要求されます。私はものまねが好きなので(ドラえもんやアンパンマン)にでてるキャラクターが得意)、真似をしているキャラクターを名前を言わずと娘が当ててくれると、とてもうれしくなります。また、アニメのキャラクターや現実の人・動物などを組み合わせて、架空の話をつくるのもアムで、夜寝る前の日課になっています。研究は想像力と創造力が大切!少しは想像力が鍛えられているかな!?

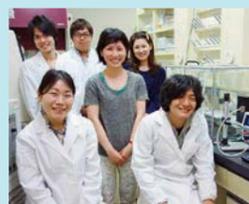
研究概要

物質をナノメートルスケールにすることで発現する特異な性質に着目した研究を進めています。複数の異なるナノ材料を組み合わせることで、多様な機能の創出が期待できます。以下に具体的な研究テーマの例を示します。

● **テーマ1「界面積み木細工によるナノシートの創製」**
ナノメートルスケールの厚みを有する2次元物質(ナノシート)は、究極に薄い機能材料として注目されています。有機・無機複合材料のひとつである金属錯体は、金属が持つ電子状態の多様性と有機化合物のすぐれた設計性が相乗的に組み合わせられることにより、新規な物性・機能創出が実現可能です。この金属錯体を基盤材料として電気的性質の異なるナノシート(金属、半導体)や、分離・透過膜として利用可能な多孔性ナノシートを創製します。

● **テーマ2「ナノヘテロジャンクション分子膜の創製」**

有機材料からなる太陽電池は軽量で曲げられるなどの特徴が



2017年度の研究室のメンバー



指導学生が国際学会で優秀発表賞を受賞

MODEL
01

液体と気体が接する界面を利用した特殊な合成方法で、分子が規則正しく並んだナノシートを創製 分離膜や太陽電池向けの新材料開発

単に性能を追求するのではなく、自然に近い製造環境でどれだけ有用な材料が創製できるのかについて、優位性と制限を見極めていきたい

あり実用化が期待されていますが、変換効率の向上が課題です。電子的な性質が異なる2種類の分子が交互に規則正しく並んだ相互介入型ヘテロジャンクション構造は、有機太陽電池の理想構造のひとつです。有機分子が自己集合して配列する性質(自己組織化)を利用して、ヘテロジャンクション構造をナノスケールで構築します。

ようなナノ材料となります。私の研究室では、液体と気体が接する界面を利用した特殊な合成方法を開発し、この新しいナノシート材料の創製を進めています。

研究のこれから

学生の頃から、ものづくりに興味を持つ一方で、大きな工場を建設して大量生産を行う製造方式に違和感を覚えることが多々ありました。企業時代に、“デスクトップファクトリー(卓上で製品を生み出す)”という概念を耳にし、大変感銘を受けました。また、企業における工場実習の一環で半導体工場に5ヶ月間勤務し、クリーンスーツを身に纏ってクリーンルームの中で終日業務を行い、その大変さを体感しました。この経験から、私達が生活する環境にできるだけ近い条件(常温、常圧)で、多量のエネルギーを消費せずに良い材料や製品を生み出すための基礎的な技術の開発に携わりたいと考えようになりました。私が開発したナノシート材料の合成は、特殊な大型装置や高温は必要とせず、液体を入れる容器とシリンジ(注射器)だけで、常温常圧で行うことができます。現在、この方法で目的の構造を有するナノシートができることがわかったので、現在は、分離膜の評価、実用化に向けた質の向上に重点を置いて研究を進めています。今後も、単に性能を追求するのではなく、自然に近い製造環境でどれだけ有用な材料が創製できるのかについて、優位性と制限を見極めていきたいです。このような観点で行う研究は、持続可能社会の実現や環境問題にも貢献できると考えています。

研究の魅力、独自性および従来研究と比べての優位性

テーマ1「界面積み木細工によるナノシートの創製」の魅力についてお伝えします。物質の分離・精製は、環境、エネルギー、化学工業などにおいて不可欠な操作です。膜による混合物の分離は、吸着分離や深冷分離などに比べ簡便かつ省エネルギーな方法として重要視されています。水の精製に使用されるフィルタも分離膜のひとつです。分離膜の材料としては、主に有機ポリマーが用いられますが、分子の通り道となる穴(細孔)のサイズが不均一であることが課題です。選択性(分離効率)を向上させるためには適度な厚みが必要ですが、厚すぎると透過性(生産性)が低下するというトレードオフが生じてしまいます。分離効率と生産性の両方を向上させるために、分子スケールでサイズの定まった細孔を有する極めて薄いナノシートの開発が強く望まれています。その候補として、配位高分子が挙げられます。しかし、一般的に用いられる合成法では微結晶粉末として得られるため、分離膜として用いることが困難です。配位高分子をナノシート化することができれば、高い選択性を保持しながら、原理的には現状の有機ポリマーより4ケタ大きな透過度の実現が可能になり、まさに夢の

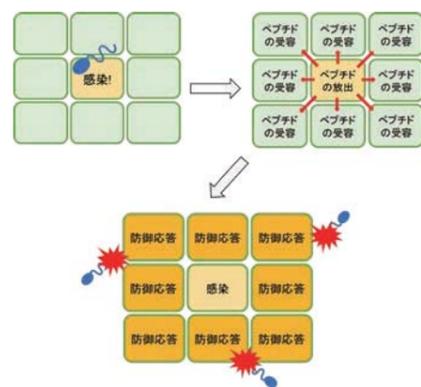


AtPep-AtPEPR システムから植物の複雑な環境ストレス応答機構の一端を明らかに

環境条件を調節できる植物工場のメリットと、これまでの環境ストレス応答研究の経験を生かして完全人工光型植物工場の発展に生かしていきたい

研究概要

植物は固着生活を営むため、病原菌や害虫から逃げる事ができません。その代わり、外敵の存在を敏感に感じ取り、複雑で精巧な防御機構を発達させてきました。植物の細胞が外敵を認識すると、その情報を素早く周辺の細胞や離れた組織に伝えます。その結果、植物体全体で防御反応が開始され、抗菌物質や消化阻害物質などを生産して更なる被害の拡大を防ぎます。私達は実験植物のシロイヌナズナを使って、被害情報を周りの細胞に伝達する23アミノ酸からなるペプチド (AtPep) を研究対象にしています。細胞外に出た AtPep は周囲の細胞に認識されなくてははいませんが、その認識に関わる受容体タンパク質 (AtPEPR) を特定しました。AtPEPR は細胞膜上に存在しており、細胞外からの情報を細胞内に伝える役割をしています。AtPEPR は外敵を認識する受容体ととても良く似たタンパク質で、同じように防御応答を起こすとともに、AtPep による情報の拡散を再び引き起こします。つまり外敵がやってきたという情報を AtPep と AtPEPR が増幅させ、強力で効果的な防御反応を誘導すると考えています。また最近になって、AtPep をシロイヌナズナに沢山作らせると、塩ストレスに対しても強くなる事が分かってきました。病害虫被害などの生物的ストレスと、乾燥や塩などの非生物的ストレスに対する応答が一部重複していることが知られていましたが、そのメカニズムはまだ不明です。AtPep-AtPEPR システムを使って、複雑な環境ストレス応答機構の一端を明らかにできればと思っています。



研究の魅力、独自性および従来研究と比べての優位性

植物自身が作り出すペプチドが、防御応答を起こすことは1991年に初めてトマトで報告されましたが、その後あまり大きな進展はありませんでした。私達がシロイヌナズナから AtPep とその受容体である AtPEPR を発見したことによって、この分野の研究が大きく進むきっかけとなりました。

植物が外敵の感染や増殖を抑える能力を獲得すると、今度は外敵がそれを打ち破る能力を獲得します。このように外敵の攻撃と植物の防御はいたちごっこで進化してきました。AtPep は多くの被子植物で保存されていますが、植物によってその重要度は異なるようで、被子植物の進化のごく初期に発達した機構ではないかと考えています。私たちはまたマメ科植物やナス科植物からそれらに特有のペプチドを単離しており、それらの方が後に発達してより有効である可能性があります。この分野では実験植物を使用した研究ばかりが進んでいますが、実用植物でペプチドの研究が役立てられることを目指して、マメ科植物やナス科植物を用いた研究も展開していきたいです。

研究のこれから

日本ではあまり感じることはありませんが、増加している世界人口を養うためには単位面積当たりの作物生産量を上げることが不可欠です。一方、病害虫による被害は、作物の生産量を減少させる大きな要因となっています。植物の防御機構を明らかにすることが、植物自身の能力を有効に利用した耐病害虫品種の育成や栽培技術につながるのではないかと期待しています。また、植物は外敵の攻撃を受けると防御物質を作り、蓄積します。防御物質の種類は植物によって様々で、抗菌作用や抗ガン作用、抗酸化作用などを示す有用な物質も含まれます。私の研究対象にしている防御応答を誘導するペプチドは、これらの物質生産経路を活性化するので、有用物質生産に応用できると考えています。

大阪府立大学は完全人工光型植物工場の研究拠点となっています。私も大阪府立大学に来てから植物工場での野菜生産に関するプロジェクトに参加しています。環境条件を調節できる植物工場のメリットと、これまでの環境ストレス応答研究の経験を生かして、完全人工光型植物工場の発展に貢献できればと思っています。

研究を社会に生かす

大学の工学分野や生命環境分野、様々な業種の企業が協同で研究を進める植物工場研究センターの最適化空調システムプロジェクトに参加され、環境ストレス応答研究の経験を生かした栽培に取り組まれています。

休日の過ごし方

現在小学1年生の娘がいます。平日はほとんど構ってあげられないので、休日は娘優先で過ごそうと思っていますが、私の都合に娘をつき合わせてしまうことも多く、仕事でも家庭でも効率よく時間を使う能力を養わなくてはいつも四苦八苦しています。私は子供のころから山に行くのが好きで、本格的な登山ではないですが、アメリカでは仲間と国立公園巡りをしていました。いつか娘と一緒に国立公園巡りを楽しめるようになることが夢です。



山口 夕

Yūta Yamaguchi
生命環境科学研究科
応用生命科学専攻
生命環境科学域
応用生命科学類 准教授
博士(バイオサイエンス)

Profile

- 1996年 ▶ 北海道大学農学部生物資源科学科 卒業
- 1998年 ▶ 奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科分子生物学専攻 博士前期課程 修了
- 2001年 ▶ 同 博士後期課程 修了
- 2001~2006年 ▶ 奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科遺伝子教育研究センター 助手
- 2004~2006年 ▶ 米国ワシントン州立大学 化学研究所 客員研究員
- 2007~2009年 ▶ 同 博士研究員
- 2010~2012年 ▶ 北海道大学農学研究科 生物資源科学分野 特任助教
- 2012~2013年 ▶ 同 助教
- 2013年~ ▶ 大阪府立大学 生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 准教授 (現職)

吉原 静恵

Shizue Yoshihara

理学系研究科 生物科学専攻
生命環境科学域
自然科学類 助教 博士(学術)

Profile

1998年▶東京理科大学 基礎工学部
生物工学科 卒業
2001~2003年▶日本学術振興会
特別研究員 (DC2)
2003年▶東京大学大学院 総合文化研究科
広域科学専攻 博士課程 修了
2003~2004年▶日本学術振興会
特別研究員 (PD)
2004~2005年▶大阪府立大学
先端科学研究所 助手
2005年~▶大阪府立大学 理学系研究科
生物科学専攻 助教 (現職)

【主要業績】
2006年▶日本植物学会第70回大会
若手奨励賞受賞

研究を社会に生かす

「形質転換植物デザイン研究拠点」として国内の植物遺伝子に関する学術研究を促進する筑波大学遺伝子実験センターの共同研究課題に採択。光センサー改変技術を生かして、農作物の生産性向上を目指します。

趣味

2年前、小学生の娘と一緒に少林寺拳法を始めました。平日の稽古では、仕事の後に体を動かして汗をかくことで、頭の疲れやストレスなどが吹き飛ばすのを感じます。また、新しいことに取り組むことの新鮮さに刺激を受け、楽しく通っています。指導者の方々は、子供達に肉体的だけでなく精神的な強さなど大切なことを繰り返し、一生懸命伝えようと接してください。実は、私自身が教育に携わる上で学ぶことがたくさんあるなあ……と実感しています。



新発想！

光センサーを改変することによって 光合成能を強化する



作物の栽培や育種に関わる方々や、
藻類を利用した物質生産に携わる方々と共に、
農作物の生産性向上を目指したい

研究概要

目的：植物の光合成能を解析し、利用・応用する

背景：「光」は生物にとって重要な環境情報の一つです。光を情報として利用するために、生物は光を認識し、光情報を伝え、発現するメカニズムを持っています。特に、光合成によって生育する植物は移動手段を持たないため、光などの外部環境の変化を正確に把握し、成長や開花などを的確に制御する必要があります。私は、このようなメカニズムの詳細を解析し、光合成能の強化につながる利用・応用を目指しています。

方法：①光認識に関わる光センサータンパク質の解析

植物は、赤や青色などの光を認識するセンサータンパク質を持っています。センサータンパク質を大腸菌を利用して調製し、光認識機構、情報伝達に関わる構造解析や機能に重要な部位の特定を行っています。

②光情報の伝達経路の解析

光センサータンパク質から生命現象につながる情報伝達経路を解析しています。

③植物改変による光合成能強化の解析

光センサー、シグナル伝達経路に関わる遺伝子を改変し、光合成能の強化をした植物の創出を目指しています。

研究の魅力、独自性および従来研究と比べての優位性

研究の経緯：光センサータンパク質は、植物にはごく少量しか含まれていないため、大腸菌などを利用したタンパク質の発現・精製系が大変有用です。私はこれまでに、様々な植物や微生物の光センサー

タンパク質の調製系を確立しました。さらに、遺伝子組換え技術によって光センサータンパク質に変異を導入し、吸収特性などに重要な機能をもつ部位の同定や、形質改変を検討しました。その結果、光センサータンパク質が固有の色の光を認識するために必要な部位を特定し、光センサーが認識する光の色を改変することに成功しました。

研究例と独自性：植物は、木もれ日(緑色光)を感じると光合成をストップさせ、もやしのように徒長します。緑色光は光合成の効率が大幅に低いためです。そこで、緑色光を「日なた」と感じるように光センサーを改変することで「もやし化」を抑制し、光合成生産の向上が可能であると考えられます。現在、光センサー改変植物の生育や結実性を詳細に解析しています。これまでに、光センサーを改変することによって光合成能を強化する例はないため、従来研究では得られなかった成果が期待されます。

本研究計画は、科研費補助金(平成28~29年度 挑戦的萌芽研究)や大阪府立大学女性研究者支援事業(平成28年度)などから研究資金を得て進めています。

研究のこれから

現在、モデル植物として広く研究されているシロイヌナズナを用いて、光センサー改変植物の解析を行っています。今後、生育や結実性が向上する条件を検討して農作物への導入を試みます。本研究計画で導入する形質は、葉透過光による光合成の不活性化を抑制するものなので、農作物の単位面積あたりの生産性向上が期待されます。栽培植物に広く利用できる育種法であるため、農作物だけでなくバイオ燃料の原料となる植物でも効果も期待されます。

さらに、光センサーの改変技術の藻類への導入を検討しています。近年、ボトリオコッカスによる油生産や、ユーグレナによるバイオディーゼル燃料の生産などが注目されています。藻類は、農作物よりも省スペースで栽培できる利点がありますが、光照射の効率化が栽培条件の課題です。藻類が効率よく光合成生産を行うために、光への応答を操作することは、大変有意義であると考えられます。

こちらでは、植物や藻類に光センサー改変を導入し、生育や光合成能、生産性などを解析することが可能です。作物の栽培や育種に関わる方々や、藻類を利用した物質生産に携わる方々と共に、社会貢献できる機会を与えていただければ幸いです。





MODEL
05

リプロダクティブ・ヘルス/ライツと 妊娠を大切にできる社会を目標に

常に女性の身体と結びついた基点を忘れず
社会現象をとらえなおすことによって、
ユニークでラディカルな研究を
提示できてきたと思います

田間 泰子

Yasuko Tama

人間社会システム科学研究科 人間科学専攻
地域保健学域 教育福祉学類 教授 博士(文学)

Profile

1979年 ▶ 京都大学文学部哲学科 美学美術史学専攻 卒業
1984年 ▶ 京都大学文学部哲学科 社会学専攻 卒業
1987年 ▶ 京都大学大学院文学研究科博士前期課程
社会学専攻 修了
1990年 ▶ 京都大学大学院文学研究科博士後期課程
社会学専攻 単位修得満期退学
1990~1996年 ▶ 熊本大学文学部地域科学科社会学講座・
同大学院文学研究科 (専任講師・助教授)
1996~1999年 ▶ 大阪産業大学短期大学部 助教授
1999~2005年 ▶ 大阪産業大学経済学部国際経済学科・
同大学院経済学研究科国際経済学専攻 (助教授・教授)
2002~2003年 ▶ オーストラリア国モナシュ大学
日本文化研究センター客員研究員
2005年~ ▶ 大阪府立大学 人間社会システム科学研究科
人間科学専攻 教授、地域保健学域教育福祉学類 教授、
人間社会システム科学研究科副研究科長 (すべて現職・兼任)
その他、同大学女性研究者支援事業プログラム・オフィサー
(実施責任者)、地域保健学域副学域長、人文科学系長などを
歴任

【主要業績】

2007年 ▶ 東京女子大学女性学研究所青山を賞特別賞
(単著『近代家族』とボディ・ポリティクス)
2011年 ▶ Connel Award, Association for Asian Studies
(代表者：小浜正子のグループ報告)
2017年 ▶ 「男女共同参画社会づくり功労者」
内閣総理大臣表彰

研究を **社会** に生かす

大阪府男女共同参画審議会委員や東大阪市男女共同参画審議会委員長を務めるなど、大阪府内の男女共同参画政策への功績が認められ、2017年に男女共同参画社会づくり功労者 内閣総理大臣表彰を受賞。大阪府立大学においても、女性研究者支援センターの牽引、ダイバーシティ研究環境研究所の設立など、男女共同参画ができる大学づくりに貢献されています。

休日の過ごし方

フラフラと出歩くのが好きです。オーストラリアは国土全体が珍しい植物園といった感じで、歩いているだけでとても幸せです。

シドニー郊外 Manly の
トレイルで撮影した花



思い出

2017年6月に内閣総理大臣表彰をいただいたとき、大学の皆さんからお祝いにいただいた花束の一部です。賞は私個人にいただきましたが、大阪府立大学をより良くしようと、一緒に頑張ってくださった方々全員のものだと思います。



研究概要

研究の出発点は、人工妊娠中絶の研究です。中絶は、刑法上は墮胎罪という犯罪ですが、第二次世界大戦後の日本を世界史上初といわれるほど急激に少子化させた行為でもあります。ミクロなレベルでは個々の女性の身体と人生に関わりながら、マクロには国の政策の基盤としての人口に関わるもので、その社会、ときにはグローバルな政治の実践となります。単著『母性愛という制度—子殺しと中絶のポリティクス』(勁草書房、2001年)では、新聞記事の言説分析から、戦後日本が決して母性を尊重したわけではなく、支配的価値は法的婚姻をした戦後家族制度であることを指摘しました。



田間泰子 (2006) 『近代家族』とボディ・ポリティクス』世界思想社。

次の展開として、中絶を時には許容し時には拒絶する家族計画運動につ

いて、日本特有の企業主導の運動を研究し、単著『近代家族』とボディ・ポリティクス』(世界思想社、2006年)にまとめました。企業中心の社会福祉制度・労働市場が家族形成や女性の地位向上と密接に結びついて形成された過程を、リプロダクティブ・ライツに留意しながら克明に論じています。

社会が妊娠をどのように意味づけ統制するのか、またどのような社会が望ましいのかを、ずっと研究しています。

研究の魅力、独自性および従来研究と比べての優位性

研究の独自性は、女性の身体とリプロダクティブ・ライツを揺るがない基点としていることから生じています。家族研究もフェミニズムも、また社会学自体もその時代時代で話題や視点が変わり、私のテーマは現代では「少子化対策」や「ワークライフバランス」「女性の活躍促進」といった政策課題と結びつきがちです。そのような課題も重要ですが、常に女性の身体と結びついた基点を忘れず社会現象をとらえなおすことによって、ユニークでラディカルな研究を提示できて

きたと思います。そのことが、1冊目の単著では、中絶と子殺しと捨て子に関する日本で初めての言説分析に結実しましたし、2冊目の単著では、日本だけにみられる企業による家族計画運動と政府の人口政策の結びつき、そしてそれに積極的に参画していった女性たちの姿とその限界を実証しました。

これらの研究は、中絶については法学や医学研究といった既存の学問的枠組みを超えた点、家族計画については1990年代にブームだった少子化の話題に振り回されることなくその源を探った点に価値があります。そして、私の研究を常に支えているのは社会学的調査、丹念に収集したデータと協力してくださった方々です。

研究のこれから

リプロダクティブ・ヘルス/ライツと妊娠を大切にできる社会を目標に、大阪府立大学でシステム改革を行い、また以下の共同研究を展開しています。

第一に、シングルマザー、特に少数派である非婚母に関して日韓比較調査を行っています。非婚母は、婚姻外妊娠の多くが中絶に到

るため、年間の出生数の約2%に留まっています。既婚であってさえマタニティ・ハラスメントが起こってしまう日本社会で、リプロダクティブ・ライツの問題が最も集約されている社会現象の一つであり、この解決なしにはジェンダー平等はないと考えます。比較対象国は日本と同様に非嫡出子の出生が抑制されている韓国ですが、市民の権利運動がとても力強く、企業のCSRとの連携も盛んなので、日本で活かしたいです。

第二に、リプロダクティブ・ヘルス/ライツのアジア諸国での比較研究です。私のフィールドは日本ですが、アジアのなかでは(世界的にも)非常にユニークな歴史状況です。アジアのほとんどの国は人口政策として家族計画を実施してきましたが、その先鞭をつけた日本が、現在どのような課題を抱えているのかを国際比較から指摘し、女性たちが置かれている状況の改善に役立てたいです。

第三に、災害に備えた女性たちのエンパワメント研究です。震災時から復興まで、女性のリプロダクティブ・ヘルス/ライツをしっかり視野に入れ、女性たち自身がエンパワメントする取組みを実現したいと模索中です。

研究概要

10代で出産されたお母さんが子育てしやすい環境を整えるための研究を行っています。先行研究では、若年妊娠は妊娠の受容が困難であったり、その後の生活に大きな社会的リスクを抱えていく可能性が高いことから、養育支援が必要なケースとされています。一方で、10代で妊娠した方のうち、出産を選択する方の割合は年々増加しています。図1は2000～2016年の10代の出産数、中絶件数を示したグラフで、出産数と中絶件数を足した値をその年の妊娠数とした場合、2015年は妊娠者数のうち出産した割合が42.5%と過去16年間で最も高い値を示しました。

2003年から多くの若年母親の方々に調査を行ってきた中で、私が重要だと考えているのは以下の3点です。1つ目に、出産後の就業支援です。最終学歴が中学卒業や高校中退の場合、就労する際の選択肢が非常に狭くなるので、通信制高校を活用して、高校卒業の学歴を取得することが必要だと考えています。

2つ目に、相談できる専門職の存在です。若年母親の中には、これまでの生育歴や学校での経験から他者と信頼関係を築くのに時間がかかる方もいらっしゃると思います。こうした方に対しては、同じ支援者が長期間継続的に関わるのが重要だと考えています。

3つ目に、若年母親を支援する場づくりが必要だと考えています。子ども連れて外出した時に「虐待してるんじゃないの」と言われたという方もおり、近所に住む人々の意識も、育児のしやすさに大きく関連します。このため、若年母親を理解し応援する地域のサポーターを増やすことが重要だと考え、研修会を実施しています。合わせて、若年母親同士が集まり、仲間づくりができる場を構築するお手伝いも行っています。

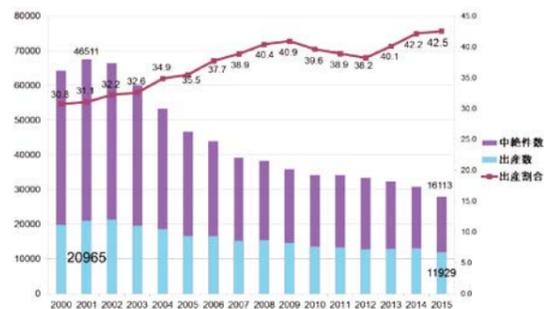


図1. 2000～2015年の10代の出産数、中絶件数、出産割合の推移

研究の魅力、独自性および従来研究と比べての優位性

研究の独自性は2つあります。1つ目に、児童虐待問題を背景に、若くして生むことのリスクを指摘する論文はこれまで多く報告されています。

研究を「社会」に生かす

母子保健や若年母親を専門とする海外の学識者を招聘し、講演会やセミナーなどを実施して、海外の母子保健制度や若年母親支援のあり方を国内で共有する活動をされています。セミナー開催の際にあたっては、英語が堪能な多くの学生・院生がスタッフとして参加されており、学生の国際交流にも貢献されています。

しかし、お聞きした話の中で、妊娠をきっかけに多くの方が生活習慣を見直したり、将来の生活設計のため節約に励んだり、子育てをされる中で努力し、成長されていました。またそのことがお母さん自身の自己肯定感を高める結果にもなっていました。そうしたお母さん自身の変化が、パートナーや家族などの変化をもたらし、周囲の人々との関係を再構築する機会にもなっています。このように、私は若くして生んだことの強みが必ずあると考えていて、その強みに焦点を当てた支援を検討していることです。

2つ目に、看護学は実践の学問であることから、研究から得られたアイデアを実践につなげることが比較的容易にできます。現在は若年母親のライフプラン構築や、若年母親を支えるサポーターの養成、妊娠初期のアセスメント能力を向上するための研修を、保健師さんや他職種の方々と一緒に取り組んでいます。また社会学を学んだことにより、看護だけではなくニーズを抱える若年母親にどのような支援が必要なのか、俯瞰的に支援のありようを考察していることも私の研究の特長だと考えています。



ニュージーランドで行われたTeen parents support conferenceでスタッフをしていた10代のお母さん・お父さん

研究のこれから

専門職の方々や報道機関から、若年母親への支援に関して意見を求められることが度々あります。そうした際に、これまでおうかがいした若年母親の子育ての実態をお話ししながら、必要な支援は何か、それを誰がどのようにして実行していくのかを提言することが、多くのお話を聞かせていただいた私の義務だと考えています。

これまで行政の方と一緒に実践をさせていただくことが多かったのですが、若年母親のニーズは教育・雇用・子育て支援など多岐にわたっていますので、今後は他領域の研究者の方々のお知恵も借りたいと思っています。また、海外では多くの若年母親に関する研究が行われていて、海外の研究者からは「日本の若年母親の実態はほとんど報告されていない」「日本は「平等」だから若年母親の人数も少ないのね」「婚姻率も高いから、日本の若年出産は問題ないのでは」など、色々なご意見をいただくことがあります。今後は海外の研究者と共同研究を行い日本の若年母親の実態を海外に報告し、一方で、海外の知見を参考に、日本における支援のあり方を検討していきたいと思っています。

休日の過ごし方

子どもが見るアニメ番組と一緒に見ています。小学生男子2人は「デュエルマスターズ(デュエマ)」に夢中。何も考えず笑える場面が多いのですが、主人公のジョー君が多くの困難を仲間の協力や機転で乗り越えるところに感動します。男子向けアニメは勇気づけられる曲が多く、朝からの講義や実習の時に聞く元気がです。デュエマの中ではVSRFのエンディング But by Fallの「Stronger」が好きで、父から子へ世代交替する歌詞の内容にうろろします。



“若くして生んだことの強み”は必ずあると信じて支援する

若年母親の子育ての実態を話しながら、必要な支援は何か、それを誰がどのようにして実行していくのかを提言することが、多くのお話を聞かせていただいた私の義務



大川 聡子

Satoko Okawa

看護学研究科 看護学専攻 地域保健学域
看護学類 准教授 博士(社会学)

Profile

1996年 ▶ 東京慈恵会医科大学医学部看護学科 卒業
1996～2002年 ▶ 足利市役所福祉部
2002～2009年 ▶ 大阪府立大学看護学部 助手・助教
2009～2014年 ▶ 大阪府立大学看護学部 講師
2012年 ▶ 立命館大学大学院社会学研究科
応用社会学専攻博士後期課程 修了
2014年～ ▶ 大阪府立大学 地域保健学域看護学類・
看護学研究科地域看護学分野 准教授 (現職)

研究概要

私の研究は、日本と韓国の両方の特徴を併せ持つ在日コリアンを主な対象としています。在日コリアンは日本在住外国人の中で最も多いのですが、そのほとんどは特殊な歴史的背景を経て日本に定住しており、言語的ハンディキャップがなく、日本の医療保険制度のほとんどが適応されています。そのため、現状把握や特別な支援はなされていません。しかし、伝統的価値観、家族主義が残る儒教精神、ジェンダー規範意識やマイノリティな環境が、在日コリアン女性たちのリプロダクティブ・ヘルスやワークライフバランスなどのセクシュアル・ヘルスに影響を及ぼしていることが予測されます。現在は、在日コリアン女性の中でも、特に家事・育児負担が大きくなりやすい育児期の女性に焦点を当て、彼女たちの現状、困難や求められる支援について調査しています。また、在日コリアンを対象とした調査と同時に、日本人、韓国人の若者を対象とした家族形成についての意識も調査しています。日・韓・在日コリアン若者の背景や特徴に着目しながら、これから家族形成していく若い世代のリプロダクティブ・ヘルスやワークライフバランスに対する価値観についての共通点や相違点も明らかにしています。



育児期に在日コリアンママ達に依頼したアンケート用紙

研究の魅力、独自性および従来研究と比べての優位性

在日コリアンを対象とした研究は、対象者と実際に関わって生の声を聴くことで、現状や困っていること、悩んでいることをささいな発言の中からも感じることができ、また普段の会話の中から次の支援の方向性が見いだせるというのが魅力です。特にフィールドワーク

として在日コリアンママ達の中にどっぷりつかることで、対象女性の現状、価値観、信念、思いが見えてくるのは研究の魅力だと感じています。在日コリアンという特殊性と子育て期のママとしての大変さを実感しているという共通項を持ち、在日コリアンの独特な環境を理解した上でのフィールドワークですので、対象者もじっくりと本音を語ってくれます。これは私にしかできない活動なのではないかと考えています。日本と韓国は多くの共通点がありますが、文化や風習の相違点も多いです。日本についても、韓国についても、そして在日コリアン社会についてもよく知った上で対象者に接することは研究を遂行していく上で大事なポイントです。そのため対象者の背景を十分理解した上で関わるといえる点を重視しています。

研究のこれから

在日コリアンは日本社会と韓国社会の両方の影響を受けています。日本と韓国は地理的、歴史的に共通するものも多く、現代では少子化、晩婚化、晩産化、妊娠先行型結婚の増加、離婚率の上昇など、セクシュアル・ヘルスに関連する様々な項目で共通の課題があります。このような中、日本でも韓国でもこれまで女性の社会的地位が低かったため、最近では女性活躍社会をアピールしているという共通点もみられます。女性活躍社会の促進には、リプロダクティブ・ヘルス、ライツの増進、ワークライフバランスの維持が必須です。そして男性の家事・育児への積極的な参加も必要になってきますが、未だ十分になえられているとは言えません。また、日本も韓国も妊娠先行型結婚の増加からの離婚率の上昇、シングルマザー世帯の貧困などが課題となっています。このような中、これまでの自身の調査から在日コリアン社会のコミュニティネットワークの強さが彼女たちの育児を支える上で重要な役割を果たしている点に注目しています。今後の研究としては、そこを強化するための支援の方向性について検討していき、日本社会での少子化対策の1つとしても参考とすることができればと考えています。

在日コリアン社会の コミュニティネットワークの強さに注目 支援しながら、日本の少子化対策に生かしたい

同じ在日コリアンママとして、在日コリアンママ達の中にどっぷりつかることで、対象女性の現状、価値観、信念、思いが見えてくるのが研究の魅力



この先生のここが

すごい

大阪市生野区の在日コリアンのママ達が集う育児サークル「たんぼぼ」や、「アプロ・未来を創造する在日コリアン女性ネットワーク」ほか、在日コリアンの若者たちが多く所属する団体など、在日コリアンの様々なネットワークを利用して、調査対象者の「視点に立った」フィールドワークをされています。

休日の過ごし方

休日はひたすら娘たちとの時間を過ごします。家族で遠くに遊びに出かけることもあれば、近くの公園や買い物に行くだけのこともあります。とにかく1日中何かを一緒にしています。今は娘が2人とも幼稚園に通っているため、休日の行事もいろいろとあります。平日は園に行くこともないので、休日の行事は積極的に手伝いにも参加し、親子で楽しむようにしています。日曜日の家事はほとんど夫に任せています。掃除や洗濯はしてくれずし、食事の手抜きや外食でも何も言いません。なるべく1週間の疲れを癒すように、そしてまた次の1週間頑張れるように、心と身体のチャージをする日にしています。



高 知恵

Chie Koh

看護学研究科 看護学専攻
地域保健学域 看護学類 助教 修士(看護学)

Profile

2002年▶大阪府立看護大学看護学部看護学科 卒業
2002~2006年▶大阪府立急性期・総合医療センター
2007~2008年▶神崎レディースクリニック
(非常勤助産師)
2010年▶大阪府立大学大学院看護学研究科
博士前期課程 修了
2010年▶大阪府立大学地域保健学域・看護学類、
看護学研究科 助教(現職)
2016年~在籍中▶神戸大学大学院保健学研究科
博士後期課程

【主要業績】

2012年▶第26回近畿エイズ研究会学術賞受賞
2015年▶第5回性の健康医学財団賞受賞
2016年▶第5回健康寿命をのぼそう!アワード
(母子保健分野)「厚生労働省雇用均等・児童家庭局長賞
団体部門優良賞」受賞



矢澤 彩香

Ayaka Yazawa

総合リハビリテーション学研究所
栄養支援系領域
地域保健学域
総合リハビリテーション学類
栄養療法学専攻 准教授 博士(薬学)

Profile

1999年▶東京農業大学農学部 卒業
2001年▶静岡県立大学大学院生活健康科学研究科 修了
2001~2004年▶中京女子大学健康科学部 助手
2004~2005年▶大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部 助手
2005~2007年▶大阪府立大学総合リハビリテーション学部
栄養療法学専攻 助手
2007~2009年▶大阪府立大学総合リハビリテーション学部
栄養療法学専攻 助教
2009~▶大阪府立大学総合リハビリテーション学部
栄養療法学専攻 准教授(現職)

【主要業績】

2012年▶太田いそ奨励賞

人が生きていく上で切り離せない 「食」と関わり



健康の維持・増進を図るための方法として「食」に、
管理栄養士や栄養士がどのように関わっているのか、
現場での応用を含めて検討していきたい

研究概要

少子高齢化が進展する日本において、生活習慣病を予防し、社会生活を営むために必要な機能の維持・向上を図ることは健康寿命延伸の観点からも重要とされています。しかし、ライフステージやライフスタイルにより、健康に関する問題や課題は異なり様ではありません。当然、健康の維持・増進のための方法もライフステージやライフスタイルなどにより変わってきます。そのため、これらに応じた健康の維持・増進を図るための具体的な方法について「食」に関わる面から研究を行っています。現在は、女性に着目して2つのテーマで研究を行っています。1つ目は、生活習慣病の1つでもある歯周病について、口腔細菌叢や歯周病原細菌の保有状況を女性のライフステージ別に調査し、食習慣や生活習慣などとの関連性について検討する、です。2つ目は、若年女性において見られる健康上の問題点を栄養面からサポートするための方法についての検討です。こちらについては、若年女性の中でもスポーツを行っている女性に的を絞って進めています。

研究の魅力、独自性および従来研究と比べての優位性

私が携わっている研究のみに言えることではありませんが、研究の対象が「人」であり、人が生きていく上で切り離せない「食」と関わっていることが魅力です。これまでに「食」が、健康と深く関わっていることは明らかになっているものの、実際には「食」をクリアに把握することはかなり難しいと言われています。その一方で、「食」に関する情報は巷に溢れかえっており、その中には根拠に乏しいものも多数あるのも事実です。また、「食」を考える際には、「食」に関わる数多くの背景について考え

る必要があります。研究では、このような社会の状況や食を取り巻く状況をふまえたうえで、食の専門家として活躍している管理栄養士や栄養士がどのように関わっているのか、現場での応用を含めて検討していきたいと考えています。



本学で生産した工場野菜(レタス)を使った「アイデアレシコンテスト」での審査の様子

研究のこれから

研究の対象が「人」であるだけに、1つの分野からのみ物事を考えていくことはできません。私の専門は栄養になりますが、実際に研究結果を生かしていく分野が栄養になるとは限らないですし、むしろ「食」が人が生きていく上で必要な限り、関連しない分野はほとんどないと思います。そのため、さまざまな方面の専門家と連携して幅広い視野で進めていくべきだと考えています。連携できる場所があれば、どんどん連携していきたいと思っています。また、社会情勢の変化とともに研究の方向性を柔軟に変更していくことも必要になるかと思っています。女性の社会進出が進み、女性の活躍の場も増えてきている一方で、付随する問題も少なくありません。自分自身も働く女性の一人になりますが、悩みや不安が尽きることはありません。行っている研究が少しでも社会に還元できるよう進めていきたいと考えています。

研究を **社会** に生かす

学内のレシコンテストの審査員を務めたり、指導学生が地域の企業が食育啓発活動の一環として実施する「愛情お弁当コンテスト」で多数入賞するなど、学校と家庭、地域、外食・流通産業、産地等と連携した、地域の健全な食生活の推進役です。

趣味

趣味は食べ歩きです。さまざまな土地でその土地ならではの食文化に触れることが大好きです。料理を食べたり、お茶などを飲んだり、料理に使われている食材を売っている市場に行ったり、地元の人たちの食生活を見たり、食文化について調べてみたり……というようなことをしているときは、時間と体力の限界を忘れて夢中になっていることが多いです。特に、アジア料理、スバイスをつかった料理には目がありません。



Members

科学技術

森澤 和子 教授

工学研究科

【専門分野、研究キーワード】

生産管理：生産計画、スケジューリング、在庫管理、輸送・配送計画などに関する最適化手法や、ナーススケジューリングなど勤務シフト作成問題の解法



楠川 恵津子 准教授

工学研究科

【専門分野】

環境対応型やEコマース環境のサプライチェーンの数理解析と最適化、高品質工程環境下での品質工程管理

【研究キーワード】

在庫管理、サプライチェーン調整、リスク分析、ゲーム理論、確率・統計



中川 智皓 助教

工学研究科

【専門分野、研究キーワード】

機械力学、車両工学、マルチボディダイナミクス、パーソナルモビリティ、人間工学



山本 由美子 講師

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

現代社会と科学技術の諸問題を、生命倫理・科学社会学・医療社会学・研究倫理・医療倫理・科学技術社会論の視点から学際的に研究している



児島 千恵 准教授

工学研究科

【専門分野、研究キーワード】

生体高分子、ドラッグデリバリーシステム、蛋白質、DNA



床波 志保 准教授

工学研究科

【専門分野、研究キーワード】

細菌、ウイルス、DNAなどを標的としたセンサ技術の確立、機能性金属ナノ粒子の作製および配列化



鈴木 志保 特准准教授

研究推進機構

【専門分野、研究キーワード】

多糖工学、糖質科学、食品プロセス工学、多糖の機能と構造に関する研究



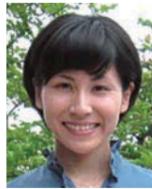
牧浦 理恵 准教授

工学研究科

【専門分野、研究キーワード】

機能性ナノ材料（ナノシート、ナノ粒子）、エネルギー材料（充電池、太陽電池、分離膜）、有機-無機複合材料、錯体化学、界面／表面科学

URL ▶ <http://mtr1.osakafu-u.ac.jp/hybrid-nanomater/>



石井 悠衣 助教

工学研究科

【専門分野、研究キーワード】

超伝導体、導電性酸化物、金属間化合物、誘電体等の試料合成・評価



内海 ゆづ子 助教

工学研究科

【専門分野、研究キーワード】

植物計測、ボッチャ選手支援、画像におけるパターン認識



金田 さやか 助教

工学研究科

【専門分野、研究キーワード】

制御工学、位置・姿勢決定、環境推定、最適化、未知環境における制御、人間-機械系協調制御、天体探査ロボット、自律無人機、人間の動作計測



高野 桂 准教授

生命環境科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

グリア細胞の機能調節、トランスグルタミナーゼ、脳虚血、神経変性疾患、ニューロン・アストロサイト・ミクログリア培養、小胞体ストレス



田島 朋子 准教授

生命環境科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

細胞内寄生性病原体による感染症の免疫応答の解析ならびに予防法の開発、リケッチア、ダニ、猫伝染性腹膜炎



藤本 由香 准教授

生命環境科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

消化管免疫、イヌの炎症性腸疾患、慢性腸症、口腔内免疫、ネコの歯肉・口内炎、肝臓における糖代謝、インスリン抵抗性、2型糖尿病



安木 真世 准教授

生命環境科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

人獣共通感染症、食中毒、発症機序解析、予防治療法開発



幸田 知子 助教

生命環境科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

ボツリヌス症発症機構の解明（特異受容体への結合、細胞内侵入・移行、毒性発現）、細菌性毒素の検出系の構築



恩田 真紀 准教授

理学系研究科

【専門分野、研究キーワード】

蛋白質の異常凝集が引き起こす疾患（コンフォメーション病）、蛋白質のフォールディングと熱安定性、蛋白質の物性・食品加工特性



山口 夕 准教授

生命環境科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

植物生理学、分子生物学、環境ストレス応答、ペプチド・植物の病原菌や害虫に対する抵抗性反応とその応用・植物のペプチド性シグナル分子を利用した有用物質の生産



上田 萌子 助教

生命環境科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

緑地保全、自然と調和した景観づくり・地域づくり、海岸緑地を対象にした植生景観の保全、地域文化に根差し古くから継承されている歴史的な緑の保全・マネジメント



中澤 昌美 助教

生命環境科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

ミドリムシ形質転換系の確立と応用、バイオ燃料生産への基礎的研究、バイオアッセイ、ELISA



竹田 恵美 准教授

理学系研究科

【専門分野、研究キーワード】

植物組織培養、クロロフィル・カロテノイドの分析、光合成活性の測定



西野 貴子 助教

理学系研究科

【専門分野、研究キーワード】

植物分類・系統学、植物種の同定、植物における系統や品種識別のための遺伝的マーカーの開発、遺伝的マーカーをもとにした希少植物の保全



吉原 静恵 助教

理学系研究科

【専門分野、研究キーワード】

光合成生物の光応答（植物の形質転換、表現型解析、リコンビナントタンパク質の調製と生化学的解析）



Members

環境

黒田 桂菜 助教

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

海陸一体型循環型社会の構築に関する研究、未活用海産バイオマスの有効利用技術（メタン発酵）、持続可能性評価指標（熱力学的指標：エクセルギー）、海陸間物質循環システムの評価、漁業、魚食



Members

経済

岡田 光代 准教授

経済学研究科

【専門分野、研究キーワード】

日本経済史、近世、大阪周辺地域



牛 冰 准教授

経済学研究科

【専門分野、研究キーワード】

医療経済学、応用マイクロ計量経済学、メンタルヘルスに関する経済分析



Members

数学・物理

細越 裕子 教授

理学系研究科

【専門分野】

物性科学、分子磁性

【研究キーワード】

有機ラジカルの合成、分子性磁性体の物性評価、結晶構造、静磁化率、交流磁化率、圧力下磁気測定、低温物性



加藤 希理子 准教授

理学系研究科

【専門分野、研究キーワード】

環の表現論、ホモロジー代数



小菅 厚子 准教授

理学系研究科

【専門分野、研究キーワード】

熱電変換材料、化合物半導体、酸化物、複合材料のバルク体作製とその電気的特性、熱的特性の評価



綿森 葉子 准教授

理学系研究科

【専門分野、研究キーワード】

数理統計学、特に多変量解析学



サバンナ ガーモン 助教

理学系研究科

【専門分野】

非平衡統計力学、物性基礎論

【研究キーワード】

量子開放系、不可逆性理論、量子情報輸送



酒井 貴子 准教授

経済学研究科

【専門分野、研究キーワード】

法人租税属性、および諸外国における一般租税回避否認規定についての研究



井畑 里和 寄附講座教員

研究推進機構

【専門分野、研究キーワード】

船舶の経済性、海上交通計画、運動性能評価



青木 賜鶴子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

平安時代文学、王朝和歌、伊勢物語、源氏物語、注釈史、王朝文学と絵画



河合 眞澄 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

日本近世文学および日本近世演劇（中でも歌舞伎が中心）、歌舞伎・浄瑠璃と浮世草子・読本との影響関係など演劇文化を総合的に研究



顧 春芳 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野】

中国明清小説研究、日中茶文化交流史研究、日中いけばな文化交流史研究

【研究キーワード】

中国、明清小説、日中文化交流、茶文化、いけばな文化、交流史



福田 珠己 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

文化地理学：(1) 文化表象とその政治性、(2) 文化的景観：形成過程と制度化、(3) 家庭空間の文化地理学的研究、(4) 記憶と場所アイデンティティなど



村田 京子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

フランス文学、フランス文化、ジェンダー、文学と絵画、幻想文学、女性作家研究



堀江 珠喜 教授

高等教育推進機構

【専門分野、研究キーワード】

比較文学、比較文化学、英文学（悪女、猫、蛇、E.A. ボー、オスカー・ワイルド、三島由紀夫、団鬼六、東野圭吾、ファッション、クルーズ、社交ダンス、英語教育、同性愛、セクハラ、ストーカー、パワハラ）



熊安 貴美江 准教授

高等教育推進機構

【専門分野、研究キーワード】

スポーツとジェンダー、スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメント



伊田 久美子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

ジェンダー論、女性労働研究、家事労働論、アンパイドワーク、ケアエコノミー、イタリア



田間 泰子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

家族社会学とジェンダー論、「理系女子」支援を中心とする男女共同参画、社会学的観点から、特に妊産婦支援に関心あり、奈良県とスウェーデン調査のほか、自然災害における支援体制づくりも考えている



東 優子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

性の健康と権利（とくに、HIV/AIDS、トランスジェンダー／性同一性障害、性的マイノリティ／LGBT、セックスワーク）、ジェンダー論、ソーシャルワーク論



佐保 美奈子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

母性看護学、助産学、思春期からの性教育、障がいのある子どもと家族へのセクシュアリティ支援、デートバイオレンス予防、男女のおつきあいのマナー、HIV・エイズ予防、教育・性分化疾患の子どもと家族への支援



伊藤 良子 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

セクシュアリティ、ジェンダー、性暴力、看護技術、看護教育



山田 加奈子 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

糖代謝異常合併妊娠の支援、妊産婦の保健指導、セクシュアリティ支援



高 知恵 助教

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

在日コリアン女性支援、セクシュアリティ支援、セクシュアル・ヘルス、思春期、性教育、在住外国人



伊藤 嘉余子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

子ども家庭福祉、社会的養護（施設養護/家庭養護）、里親養育、養子縁組、要支援子育て家庭への支援（子ども虐待等）



山野 則子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

スクールソーシャルワーク構築と評価、子ども虐待防止ネットワーク、子ども若者支援における福祉と教育の協働



岡崎 裕子 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

小児看護学、子どもへの説明、プレパレーション、子育て支援、ペアレンティング



古山 美穂 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

子ども虐待予防、子育て支援、性教育、セクシュアリティ



上野 昌江 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

地域看護学、公衆衛生看護学、子ども虐待予防における保健師の支援技術



中山 美由紀 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

家族の心理的健康、多重役割、生殖補助医療、ハイリスク児、育児支援



小川 由紀子 教授

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野、研究キーワード】

口腔保健学、歯科疾患の予防教育、食育



立山 清美 講師

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野、研究キーワード】

発達障害領域の作業療法（ADL、ソーシャルスキル、特別支援教育、家族支援）、感覚統合療法



榎木野 裕美 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

子ども虐待、子育て支援、子どもの入院



渡邊 香織 教授

看護学研究科

【専門分野】

母性看護学・助産学

【研究キーワード】

月経痛・月経前症候群に対する支援、ストレスマネジメント、妊婦の身体活動量と効果の検証、妊婦の腰痛予防ケア・歩行動作分析



中岡 和代 助教

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野、研究キーワード】

自閉スペクトラム症児の食に関する行動障がい重症度を測定する尺度の開発、発達障害領域における作業療法、脳卒中急性期に意識障害を呈す患者への作業療法



若林 身歌 准教授

高等教育推進機構

【専門分野、研究キーワード】

学校における環境教育およびESD（持続可能な開発のための教育）、授業とカリキュラム開発



大川 聡子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

マイノリティ、若年妊娠・出産、ペアレンティング、性教育



北川 末幾子 准教授

看護学研究科

【専門分野】

医療と教育を併せ持つ教育職

【研究キーワード】

養護教諭・学校保健・健康相談活動・健康教育・救急処置・学校安全



巽 真理子 特准准教授

研究推進機構

【専門分野】

父親の子育てと男らしさ（親の子育てとジェンダー規範）、ワーク・ライフ・バランス支援とダイバーシティ・マネジメント、男女共同参画政策など

【研究キーワード】

家族社会学、ジェンダー論（フェミニズム、男性学）



中嶋 有加里 准教授

看護学研究科

【専門分野】

助産学・母性看護学

【研究キーワード】

妊産婦の保健行動、妊娠期からの自動車利用安全教育（シートベルト・チャイルドシート）



長田 暁子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

子どもと家族の看護、家族が健康問題をもつ子どもの支援、子どもに関わる専門職の支援



児島 亜紀子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

ソーシャルワークの倫理・価値、日本のソーシャルワーカーの専門性、女性支援、福祉哲学



山中 京子 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

(1) 対人支援職（福祉職、心理職、教育職、看護職など）が行う相談活動の面接技法、(2) 多職種チームのチーム形成と課題解決、(3) 慢性疾患患者の在宅/地域生活支援、(4) DV被害者の地域生活支援



嵯峨 嘉子 准教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

公的扶助、生活保護制度、生活困窮者、福祉事務所、貧困問題



三田 優子 准教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野】

障害者への地域生活支援（居住サービス、対人援助サービス等）、メンタルヘルスの基礎知識およびケアのあり方について

【研究キーワード】

障害者、福祉、保健、メンタルヘルス



田中 京子 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

がん看護、ターミナルケア、周手術期看護、ストレス・コーピング、危機理論、がん患者の意思決定支援



旗持 知恵子 教授

看護学研究科

【専門分野】

高血圧、心疾患、糖尿病他慢性疾患患者の看護ケア、運動療法や食事療法など生活管理への介入研究、病の意味の調査

【研究キーワード】

虚心性心疾患、高血圧、行動療法、病と文化



岡本 双美子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

家族看護、グリーフケア、退院支援、在宅緩和ケアシステムの構築



富川 順子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

精神看護学：精神疾患を持つ人・家族の回復過程・ケア・生き様、セルフケア理論に沿った看護過程、心理療法を用いた看護ケア、精神科訪問看護、精神科臨床看護師教育、対応困難とされる人への看護ケア



林田 裕美 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

がん看護、がん治療（手術療法、がん薬物療法、放射線療法）を受ける患者・家族への看護、外来で治療を受けるがん患者・家族への看護



松下 由美子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

在宅看護学、在宅ケア、地域包括ケア、一人暮らし認知症高齢者への支援、訪問看護の質保証

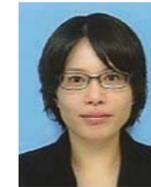


森本 明子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

看護情報学、疫学、糖尿病の発症および進展予防、糖尿病療養支援、禁煙支援、継続的な支援へのICTの活用



藪下 八重 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

慢性看護、炎症性腸疾患患者の療養支援（経腸栄養、ピアサポート等）、倫理調整、倫理的看護実践



南村 二美代 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

療養支援看護学（慢性看護学）、糖尿病、患者教育、セルフマネジメント



徳岡 良恵 助教

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

がん看護、化学療法、緩和ケア



中村 雅美 助教

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

慢性病患者へのケア：慢性病患者のセルフマネジメント支援や倫理調整（特に慢性腎臓病・透析分野）、慢性腎臓病患者のセルフマネジメント支援や腎代替療法に関する意思決定支援、透析患者の終末期看護



深山 華織 助教

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

家族介護者の仕事と介護の両立支援、日中独居高齢者、在宅看護



安本 理抄 助教

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

地域保健、公衆衛生看護、結核患者支援、保健所保健師活動



西川 智子 准教授

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野】

リハビリテーション（作業療法）

【研究キーワード】

身体障害、高次脳機能障害、がん術後リンパ浮腫の早期発見指標の開発、日常生活活動の動作学習、福祉用具の評価・選定、スプリント成型技能の評価指標開発



藤堂 恵美子 助教

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野】

生活期リハビリテーション

【研究キーワード】

訪問リハビリテーション、ICF、活動・参加、福祉用具



生水 智子 特認助教

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野】

精神科作業療法を用いた家族支援、家族の精神科作業療法への参加が家族の態度に与える影響

【研究キーワード】

精神障害、精神科作業療法、家族、態度、共同作業



長畑 多代 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

老年看護学、看取りケア、高齢者施設の看護、認知症高齢者の看護



中村 裕美子 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

看護学、在宅看護、高齢者、認知症予防、看護教育、eラーニング、潜在看護師



木下 明美 准教授

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野、研究キーワード】

脂質関連成分の機器分析法の開発（対象：生体試料、加工食品）



矢澤 彩香 准教授

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野、研究キーワード】

公衆栄養学分野、生活習慣病予防、中高齢期、成人期の健康問題



江口 恭子 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

認知症高齢者の身体合併症看護、パーソンセンタード・ケア、認知症ケアマッピング



根来 佐由美 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

地域看護、高齢者、介護予防、健康支援、スクンケア



川上 由紀子 講師

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野、研究キーワード】

高齢者の食事形態、調理学教育、栄養アセスメント



中西 遥 特認助教

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野】

Alzheimer型認知症高齢者のイス着座動作の身体の使い方の特徴

【研究キーワード】

Alzheimer型認知症、視覚認知、ボディイメージ、高齢者



山内 加絵 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

高齢者施設の看護、看取り、看護・介護職の連携



山地 佳代 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

老年看護、認知症高齢者の看護、意思決定支援、アドボカシー



大関 知子 教授

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野、研究キーワード】

高齢者の栄養管理、生活習慣病予防、食文化、食教育



樋口 由美 教授

総合リハビリテーション学研究科

【専門分野】

老年学、運動機能障害学、老年期リハビリテーション、高齢者の運動機能を通じた介護予防

【研究キーワード】

高齢者、歩行能力、運動プログラム、住居/施設環境改善、転倒予防、身体機能評価、介護労働評価

URL ▶ <http://elderly.rehab.osakafu-u.ac.jp>

真嶋 由貴恵 教授

人間社会システム科学研究科

【専門分野、研究キーワード】

医療・看護分野でのICT（情報通信技術）の活用、医療・看護情報支援システム、看護師などの医療職教育支援システム、eラーニング、生体データを利用した看護職の腰痛予防、教育工学、授業実践方法など



北村 愛子 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

急性看護・クリティカルケア看護分野、倫理調整／アドボカシー、ストレス・コーピング、危機介入、エンド・オブ・ライフケア



佐藤 淑子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

感染看護学：感染管理の組織活動、感染予防に関する認識と行動



中岡 亜希子 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

看護基礎教育、看護技術教育、クリティカルシンキング、ライフストーリー研究



志田 京子 教授

看護学研究科

【専門分野】

看護管理学

【研究キーワード】

倫理的組織風土 看護師の倫理教育 ヒューマンリソースマネジメント



杉本 吉恵 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

看護技術、体位変換、車いす移乗介助、腰痛予防、Safe Patient Handling、ケア用具などの評価



山口 舞子 講師

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

下肢運動器疾患（主に膝関節）に伴う疼痛の緩和方法の開発と評価、ストレスの緩和やリラクソスの効果に関する生理的指標の開発



井上 奈々 助教

看護学研究科

【専門分野】

看護教育学、急性期看護学

【研究キーワード】

フロー理論に基づいた教育的アプローチおよび実習指導、クリティカルシンキング、胃がん患者の食生活の指導



田嶋 長子 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

精神看護学、精神科看護実践、Clinical Competency、精神科訪問看護、精神看護学実習指導



細田 泰子 教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

看護教育、継続教育、臨床学習環境、臨床コンピテンシ、教育評価、セルフケア不足看護理論



隅田 千絵 助教

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

看護教育・学生教育、臨地実習、実習環境、レジリエンス



大江 理英 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

救急看護、ハイリスク患者への周術期看護、周術期管理チーム



紙野 雪香 准教授

看護学研究科

【専門分野、研究キーワード】

臨床看護におけるナラティブ・アプローチ、看護実践の意味の探究



車 美愛 教授

人間社会システム科学研究科
【専門分野、研究キーワード】
 現代韓国語の位置名詞、ハングルの構成と機能



高垣 由美 教授

人間社会システム科学研究科
【専門分野、研究キーワード】
 テキスト言語学、フランス語学、フランス語教育



宮永 千恵子 教授

高等教育推進機構
【専門分野、研究キーワード】
 動機づけなど情意要因と英語習熟度との関係および英語リーディングのメカニズムの研究



稲垣 スーチン 准教授

高等教育推進機構
【専門分野、研究キーワード】
 日本人大学生を対象とする英語多読授業の効果、映画を用いた英語授業



徳永 アン 教授

人間社会システム科学研究科
【専門分野、研究キーワード】
 機能言語学およびジャンル解析の英語教育開発への適用（アカデミックリテラシーに特に焦点を当て）



奥村 和子 准教授

人間社会システム科学研究科
【専門分野、研究キーワード】
 日本語の歴史



中村 直子 准教授

人間社会システム科学研究科
【専門分野、研究キーワード】
 ドイツ語学、ドイツ語教育、複合動詞の「語」としての категория、新旧の正書法規則について



岩井 千春 教授

高等教育推進機構
【専門分野、研究キーワード】
 専門分野（企業の事業内容等）に特化した英語教育、観光業における外国人応接、観光学の専門英語教育、観光学、語用論



パンジエ マリーフランソワズ 教授

高等教育推進機構
【専門分野、研究キーワード】
 フランス語教育（FLE）、academic mobility (short term sojourn)



藤岡 真由美 教授

高等教育推進機構
【専門分野、研究キーワード】
 英語教育：(1) 大学院生、研究者による英語論文作成プロセスの研究、(2) 英語アカデミックライティング授業の理論と実践、(3) ライティングセンターの理論と実践、(4) 英語学習者のための語用論

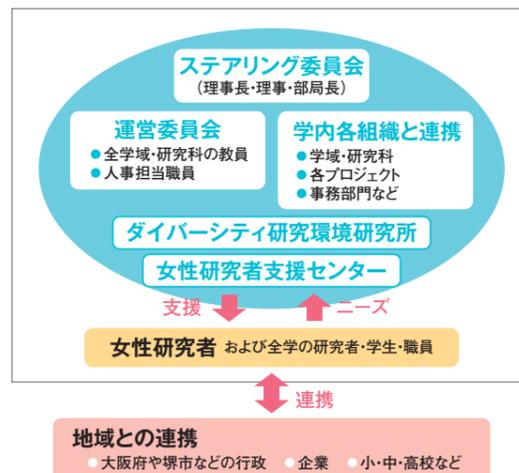


大阪府立大学の女性研究者支援

研究者のワーク・ライフ・バランスを支える女性研究者支援センターとスキルアップ、キャリアアップを支援するダイバーシティ研究環境研究所が中心となって大学全体で、女性研究者の活躍をバックアップします！



組織・実施体制



ダイバーシティ研究環境研究所の取組

事業の目的

異分野融合・共同研究の女性研究リーダーへの支援、女性上位職の両立支援など、産学官連携に強みを持つ本学の女性研究リーダー育成のための取組を推進します。

目標と行動計画

第3期（平成29～34年度）中期計画と中期目標に目標・行動計画を位置づけます。

- 平成28年度以後、新規採用における女性教員比率30%
- 平成32年度に、女性教員比率21%
- 女性教授ゼロの部局ゼロ
- 上位職（教授・准教授・講師）における女性比率23%
- 上位職（副学長・理事・学長補佐）における女性比率25%

取組の概要

- 学内にダイバーシティ研究環境研究所を設立し、女性研究者リーダーの育成と上位職に就くための支援を行います。
- 女性比率の数値目標達成のための計画を部局ごとに取り組み、高成果の部局にインセンティブを付与して支援します。
- 若手女性研究者の支援として、パーソナル・ポートフォリオ（上位職へのロードマップを含む）の活用と研究力強化プログラムを実施します。

ダイバーシティ研究環境基盤整備

- 女性教員・研究者数、比率の増加のための取組を行います。

部局単位で、一定の女性研究者採用比率を確保する人事計画を策定し実施します。

部局の取組のうち、目標達成度の高い部局にダイバーシティ研究環境整備費を付与して支援します。

女性上位職の両立支援および、博士研究員・教員（特認含む）の研究とライフイベントとの両立・復帰支援として、研究支援員の配置などを行います。

- 女性若手研究者（助教および准教授以下の新規採用者）に対して、分野横断的に女性メンターを配置します。

- ダイバーシティ研究環境研究所コーディネーターと、女性メンター、担当URAが連携し、研究者のパーソナル・ポートフォリオ（昇任に向けてのロードマップを含む）を作成し、研究力向上の支援を行います。

その他

- 異分野研究領域を融合した研究の促進
- 理系女子人材の発掘とキャリア支援
- 公立大学としての地域連携力の活用

スキルアップ・キャリアアップ支援

スキルアップ支援プログラム

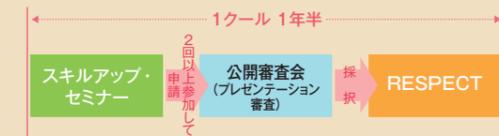
【目的と位置づけ】

女性研究者を対象としたスキル向上に資するために行うプログラム（1クール1年半）。新規採用の若手女性研究者は必修。

RESPECT（研究実践力強化支援プログラム）

【目的と位置づけ】

女性研究リーダーの育成のため、スキルアップ支援プログラムの上位研修プログラムとして、RESPECTを実践します。女性研究者がリーダーシップを発揮し、研究グループを形成して研究活動を推進するために、インセンティブを付与し、研究の加速を支援します。



※セミナーについて

- 「外部資金獲得セミナー」▶ 外部資金獲得のためのスキルアップ
- 「英語論文作成セミナー」▶ 研究成果を海外へ発信する力をつけること
- 「プレゼンテーション力向上セミナー」▶ プレゼンテーション力及び教育力の向上
- 「マネジメントセミナー」▶ 研究チームや研究室・部局を運営するマネジメント力のある上位職の養成

女性研究者支援センターの取組

環境整備

推進体制を整えるとともに、研究者への直接支援などを行っています。

研究支援員の配置・在宅勤務支援

妊娠・出産・育児および介護で研究時間の確保が難しい研究者に対して、研究を補助する支援員を配置します。また、在宅勤務の支援として、webカメラ付きパソコンの貸与を行っています。

女性の相談窓口

女性の研究者や職員、学生の困ったことや悩みの相談に対応しています。

・支援センター相談

研究者や研究者になろうとする女性が、研究を続けていく上で困っていること、悩んでいることの相談を受け付けています。

・女性の健康相談

心や体の悩みについて、助産師などが個別相談やミニ・セミナーを行っています。

・メンター相談

研究を続けていく上での色々な悩みを、先輩の研究者に相談できる仕組みを作っています。



ロールモデル・セミナー

全学的意識改革

女性研究者が研究を続けていくことへの理解を進めます。

・ロールモデル・セミナーやロールモデル・カフェの実施

ロールモデルとなる、社会で活躍している女性からお話を伺うことで、多様なキャリアパスを考える機会を提供しています。

・子育て応援ピンバッジ・シール・キャンペーンの実施

・「会議は17時まで」キャンペーンの実施

・ロールモデル・バンクの構築

・大阪府「男女いきいき・元気宣言」事業者、堺市子育て応援団に登録

・「大阪市女性活躍リーディングカンパニー」認証取得



「大阪市女性活躍リーディングカンパニー」認証取得



「会議は17時まで」ポスター



子育て応援ピンバッジ・シール



学内保育施設「つばさ保育園」

研究者育成

女性が研究者として活躍するキャリアパスの構築を支援するとともに、理系を志す女性の数を増やします。

研究のスキルアップ支援

英語論文の書き方セミナーや外部資金獲得セミナー（個別相談会）などの実施

女性研究者のネットワーク構築

女性研究者同士がネットワークを構築できる環境作り
・女性研究者懇話会へのサポートなど

理系女子大学院生チーム「IRIS (アイリス)」

IRIS (アイリス) は、次世代の女性研究者の育成と、小中高生に科学の面白さを伝えることを目的として、2011年に誕生しました。

4研究科（工学・生命環境科学・理学系・人間社会システム科学）の理系女子大学院生が、学長から任命を受けて活動しています。



IRIS ロゴマーク



IRIS 任命式

IRIS の主な活動

■ 小中高生対象の裾野拡大事業【サイエンス・キャンパス】

地域の要請に応じて、科学実験教室「サイエンス・キャンパス」を開催しています。サイエンス・キャンパスは、企画から実施、運営まで全て IRIS が行うことによって、IRIS 自身にとっても学びの機会となっています。



■ 理系進路相談【めざせ!理系女子コーナー】

理系への進路を考えている女子高校生、受験生を対象に、大学生活や研究内容などについて説明をしています。

編集後記

このロールモデル集では、大阪府立大学の女性研究者たちの驚くほど豊富で、多岐にわたる研究分野を紹介いたしました。

いただいた原稿を読み、取材を通して感じたことは、先生方がみな「自分の研究を社会に生かして、より良くなった未来」を描いていることでした。「自分の力が社会で生かされていること」を実感しながら仕事をするというのはこんなに人間をポジティブに、生き生きとさせるのだなあ、と感じ、同じ女性として私自身の今後の生き方に大きな刺激をもらいました。お子さんや趣味の話になると、先生方がほろっと、リラックスした表情になったのも忘れられません。

最後になりましたが、このロールモデル集作成にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

- 真嶋由貴恵 ダイバーシティ研究環境研究所長
人間社会システム科学研究科・現代システム科学域 教授
- 森澤 和子 女性研究者支援センター長 工学研究科・工学域 教授
- 巽 真理子 ダイバーシティ研究環境研究所 特認准教授
- 牧島 泰実 女性研究者支援センター コーディネーター
- 白石 恵美
- 中野 恭子
- 萩原 歩
- 森元 敏恵





大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

大阪府立大学

ダイバーシティ研究環境研究所

〒599-8531 堺市中区学園町1番1号

TEL. 072-254-9649 (ダイヤルイン)

FAX. 072-254-9856

<http://diversity.21c.osakafu-u.ac.jp>

文部科学省 科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」事業

